
そのあと

長野晃輝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのあと

【コード】

N0957W

【作者名】

長野晃輝

【あらすじ】

ある日偶々バイクに乗っていた僕は車に道を譲った。そのときと
そのあと、僕はすこし考えることになる。

バイトの帰りだったと思う。

僕は原付で道を走っていた。

僕のちよつと先に対向車が駐車車両をよけて進もうとしていた。

距離的にはちよつと微妙なところだったのだけど、僕は車が余裕をもって通れるほどの場所で止まり、対向車に道を譲った。

その対向車の運転手は片手を挙げてそのまま進んだ。

と、その後ろにも車がいた。

ついでだったので僕はその車にも道を譲った。

その運転手も片手を挙げ、駐車車両をよけて行った。

僕は何事もなかったかのように原付を走らせたが、しばらくして無性に泣きたくなっていた。

胸の奥から温かい何か溢れ出ている。僕は嬉しいんだ。嬉しいけれど、・・・泣きたいんだ。

どうしてなんでもない普通の、当たり前な出来事で泣きたくなるのだらう。

いや違う。普通のことを普通じゃないから泣きたいんだ。

考えてみれば道を譲っても何一つせずに普通に進んでくる人も多い。それどころか、無理やり入り込んでくるような危険なドライバーもいる。

いや、車のことだけじゃない。当たり前前の感謝の言葉や、謝罪、譲り合いができない、しない人は多い。

でもそのあと、気づいたんだ。

僕は車で道を走っていた。

駐車車両をよけて道を通ろうとしていたところ対向車線を走っていた原付バイクが道を譲ってくれた。

急いでいた僕は道を譲ってくれた原付バイクを尻目に先に進んだ。

それは、当たり前前の感謝ができない人と、同じことだ。

気づいた時にはもう原付は随分と離れた道を走っていた。

当たり前前の感謝や、謝罪、譲り合いができない人もいる。僕自身にも、それは言えることなんだ。

僕はそれをしっかりと胸に刻み込み、今日を生きることを決めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0957w/>

そのあと

2011年10月8日02時34分発行